

せたかむい

発行・古平町史編纂室
文化会館 842・2590
第183号 平成16・12・1

年表で読む

古平の歴史

《89》

古平のタコ漁

■副業としての漁

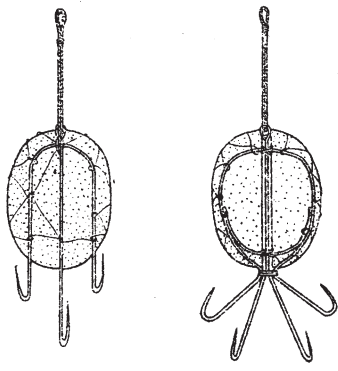
タコ漁についての記録はほとんど無く、自家用として釣(か)ぎで漁獲する程度だったよう
で、明治四五年の記録がある。

それによるとイサリという漁具を使い、タコのいる海底を引き、タコが取りついたところを引き上げるといふ漁法である。こうして取ったタコは鮮魚商が集荷し小樽市場へ出荷していたという。

当時は帆を掛けた保津船(ホツセン)で鮮魚などを輸送していたが、樺太航路の定期船が入港中のときには、樺太での需要が多かったため値上がりした。それ

でナギの日であれば、川崎船で(樽)を押して朝のセリに間に合わせることもあった。
タコは煮てから酢蛸とし、四斗樽詰(セリットル)程にしたものが需要があった。

←イサリ これに餌をつけて、四〜五個を磯船で引いた



一般にタコ漁は鯨漁の終わる頃から出漁し、盛漁期は五月から六月で、それぞれの漁期のつなぎ漁として出漁していた。

■タコの名前

タコの語源は古くは「タルコ」と呼んでいたが、いつの間にかルが抜けてタコになったのだという。タルは足で、満ち足りたという意味、コは壺(こ)である。つまり丸くふくれた腹に食べ物をいっぱい詰め込んで、常に満ちしている生き物という意味だ。

また、江戸時代の本には「タコは多股(たこ)から来ている」多くの股を持った生き物ということなのか?

英語では「オクト・パス」オクト(8)・パス(足のこと)だから日本と同じ意味である。

蛸という字は、もともと「足

の細長いクモ」という意味であるが、タコは丸い体を支える長い足を持つているので、このクモに似ていることから海蛸となったのだろう。

欧米では、タコやイカ・エイなどという妖怪じみた形?のものは嫌われ、悪魔の魚(デビルフィッシュ)と言って、スペイン・ポルトガル・イタリアなど南欧を除けば食べる習慣はないそうである。

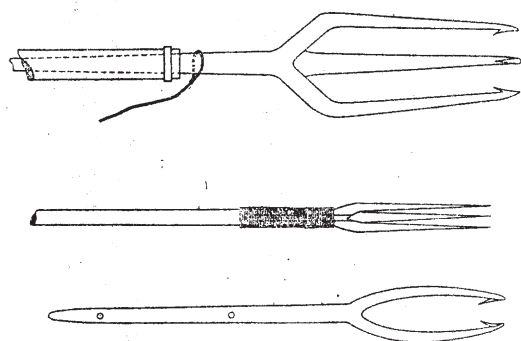
■タコつぼ漁

タコを傷つけないで捕獲できる最も進んだ漁法であるが、何とこれと同じようなつぼが、今からざっと二千年以上も前の明石市(兵庫県の遺跡から出てきたのである。

「日本山海名産図会(寛政二年・一七九九)にも章魚(タコ)のことが出ている。

漁具別による漁獲高

漁具	磯船	漁期	漁獲量	金額
イサリ	二〇隻	六〜八月	一〇三二二五*	二〇六三円
鉤	二〇隻	二〜三月	二六二五〇*	七〇〇円
延縄	一八隻	二〜二月	九七五〇*	三六〇円
鰈手繰り網			一四一七五*	三七八円



「諸州にあるが、中にも播州明石に多い。焼き物の壺二つか三つを縄で縛り、水中に投げ入ると自分から入ってくる。この焼き物の壺を蛸壺といい、町では花瓶としても使う。蛸は壺から容易に出てくるが、出ないときには底をひっかくと自分から出て壺をはなれる。このように蛸壺を海底に沈めておき、タコがその中にひそむのを待つて、順番に手繰りあげて獲る。」

■変わった漁法
これとは逆に、三重県に伝わる昔から使われていた一般的な漁具であるヤス

るタコを使ってイセエビをとるという面白い漁法もある。

イセエビがタコを恐れるという習性を利用したもので、さおの先にタコを結わえつけ、岩場にひそむイセエビの前でゆらつかせる。驚いて逃げるところを捕まえるというものだが、タコが弱ってくるとうで釜が待つていというから、タコにとつては因果な話である。

タコは味が良いのはもつとも大変な美食家。エビ・カニをはじめ貝類を手当たりしだい食べ、日本では真珠の養殖場で一番の嫌われものという。

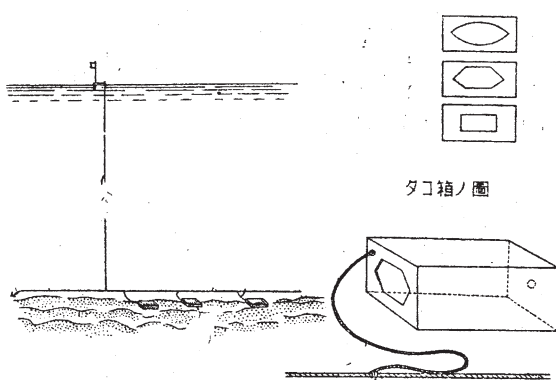
■日本近海のタコ
日本人のタコ好きは大昔からのようで、石器時代の遺跡からタコ壺らしいものが発見されている。土地によつては、正月にタコを食べるという習慣も昔からのようで、祭事に関係しているとも言われている。

タコの長いのは足と言っているが、腕と言う人もいる。学問上からは、軟体動物→頭足類→八腕目という仲間なので、これは「八本の腕？」ということ

だろうか。

日本近海に棲むのは約四〇種類、一番なじみの深いのはマダコで、産額も多く味も良いので日本では食べ物として重宝がられている。マダコは大きいものより、やや小ぶりで、特に岩場にいるのがうまいといわれている。

春から秋にかけて産卵し、夏場が味が良いという。煮ダコを買うときは、皮のはがれやすくなったものは古いのでさける。



← 壺に代わって使われていた木製のタコ箱(昭和30年代頃)

■たこの知恵
タコはなかなか知恵のある忍者で、自在に体形や色を変えて相手をたぶらかし、眼は千里眼のようで、おまけに忍耐強い。夜までじっと岩陰にひそんでいて、夜陰に乗じてエビ・カニ・小魚・貝などを食べる。

また、二枚貝が口を開けるのをじつと待つていて、口をあけたときすばやく小石を投げ込み、あとはカラスとトンビといわれる強力な歯で料理する、そんなこともやるそう。

■タコの呼び名と文字
一般にはひっくり返して「タコ」と言っているが、地方名は複雑で、北海道ではほとんどれないマダコだが、地域によつてはミズダコやヤナギダコのメスをマダコと呼んでいる。オスだとどちらともミズダコと呼ぶそうだが、これは肉質が水っぽいからである。

タコの漢字は章魚・蛸・多古・多胡・太古・鮟・鱗・鱗・潮魚・八梢・章拳・章拒・章花魚・海蛸子・海和魚・海肌子・望潮魚などなど三〇近くもある。

大正一二年

▼五月二十九日

起床七時、朝から客があり忙しい。熊さんらは馬耕かけが来たので、畑の枝などを片付けに行く。右衛門馬車屋は切ったリソグの樹を運搬する。店はひっきりなしに入金があり、三松尾一、一〇〇円を筆頭に合計二一〇〇円の入金があった。午後銀行へ行き預金をする。帰り①、その他のところに寄り掛け金を受け取る。田小林の鬼頭さんが来る。夜食を出し、いろいろと一時頃まで話をする。聞けば古平、美国とも旅館はどこも満員とのこと。エライ景気だ。行商もずいぶん来ているが、古平では支那行きの荷物が毎日三〇個から四〇個あるが、代金引き替えて受けている。一人で一〇〇〇円以上の払い込みもあるという。大正八、九年以上の景気だとのこと。青森から①大岡店員が来たので、イワシ網の話など聞く。大いに参考になるところがあった。

▼五月三〇日

雨がシヨボシヨボ降り、気分

も落ち着き心地よく休む。七時に起床する。田の鬼頭さん、九時頃沖村まで行かれた。今日も勘定に来る人が多く、一、四〇〇円程の入金がある。今年は意外と掛け金の入りが良く、これは景気が良いのだろう。余市、美国赤岩大謀から、今年もアバ縄四〇〇丸、カニ縄五〇〇把入用とのこと。で注文する。今日入港するはずの平安丸、どこにいますのかまだ入港せぬ。この雨ではかえって入港しない方がよかった。夜、佐渡の弥吉さんが来たので酒肴を出す。雨も午後五時頃から晴れた。

▼五月三十一日

就寝中の五時頃、平安丸が入港したと全から電話がある。早速馬車屋へ行き、アバ縄の引き取りを頼む。朝食後、七時頃自転車で行く。昨日の雨で道路はまだ水たまりがある。荷物は合計で四一九個、外に丸竹一九個ほか他店への荷物六〇個、みそとぞうりなど二〇個程もある。曇り空だが幸いに雨は降らぬ。馬車屋の手が廻らなくて困る。新潟、直江津行きの鯉製品も多く馬車屋も忙しい。船の荷役には

何と言つてもこの辺りが一等地だ。警察署を移転して荷揚場にしたらどんなにか便利ならん。越中屋の倉とエビス倉に二〇〇個ずつ入れ、夕方までに終わります。まずはひと安心した。

▼六月一日

起床六時、曇り空だ。熊さんは坂下さんらと農園へ行き、14号の畑にイモまきをやったとのこと。店は行李(うり)、綿糸がよく売れている。一〇時頃②へ行く。東洋への網四〇〇間の注文を電信で打つ。全へ運賃二〇〇円程を払う。後、安藤へ自転車を預けて美国行き。暑からず寒からず、一年中で一番心地よい時季だ。いつ見ても群来村から厚吉岬辺りの景色は、実に活動写真(映)を見ていよう。先日の賑やかさにひきかえ、漁夫が残らず帰ったのでヒソソリだ。③、④、川岸、「」などに寄りいろいろ話をし、刺網の注文を受けた。途中⑤に寄つたら、大正九年の貸し金一九〇円余りのうち五〇円を受け取った。これはもうけものだった。七時頃新地に着いたが、新地方面の賑やかさはまるで小樽辺りのようだった。一年で一

番景気の良いときだ。帰って食後、⑥の売出しのピラを書く。⑦からアバ縄の仕切りが来た。

▼六月二日

起床六時、気候も良く活動にはよい時季だ。熊さんは出面連中と農園行き、まきつけをやっている。出面もこの頃は暇になったとみえ、集めるのも楽になった。今日はカムチャツカ行きの団体が六〇人余りも出稼ぎに行くというので、行李がよく売れる。北見方面に貝引きに行く者、木材工場とか土木工事などに稼ぎする者が沢山いて、今月の中頃にでもなつたら、町はひっそりして寂しくなることだろう。夏漁が無くなつてから寂しくなつた。イワシ網でも盛んになってくれればよいが。一〇時頃銀行へ行き、⑧へ一、〇〇〇円送金する。本年のアバ縄代金はこれで四、三〇〇円送金したことになる。外に運賃、はしけ代、馬車賃など三三〇〇円、合計四、六〇〇円になる。これからは大いに売り込みにも活動せねばならぬ。入船町方面五、六軒で二〇〇円程、午後一時帰る。この頃から風が強くなり、砂塵を飛

ばしだんだん強くなる。火防組
合員も町内を回る。五時頃、ヨ
主人のところへ見舞いに行く。
過日、土場だけがをしたが追々
良くなってきたとのことだ。小
学校高等科生徒一五〇余名が、
今日、余市の運動会見学に陸行
夕方の機船で帰るとのこと。夜
父は老人の通夜に行く。夜に
なっても風が強く皆警戒してい
る。

▼六月三日

起床六時、曇天で小雨が降る。
店は閑散、柳行李が売れる。この
雨で熊さんも農園行きを休む。
沢江方面の集金の残りのところ
を歩く。午後、畑方面へ行く。帰
りリンゴ畑を見回る。相当に花
もついている。畑も馬耕をかけ
たので広々ときれいになってい
る。58号は花が散り、6号や旭は
今が盛り。種金の粕干しもいよ
いよ終わり、後片付けをしてい
る。帰り太に寄り、しばらく話を
して七時帰る。

▼六月四日

昨夜は大雨であつたが、今朝
はすっかり晴れた。道路はまだ
悪い。貸し方のことで電話をし
たら、約束通り今日支払うとい

うことで、好機逸すべからずと
自転車で行き、一〇〇円受け取
る。帰途、全へ寄る。本年の薄漁
(二〇〇石程度という)に加え
え、大しけで船や網で四、〇〇〇
円以上の損害だとこぼしてい
た。これでは同情にたえぬ。五〇
〇余円あるが、今日はこれだと
半金を受け取る。また頼むとの
ことだった。帰って昼食後、銀行
へ行き送金する。帰途、全、山
川、田、山下などへ寄る。ヨ
で行商人が反物を出しているの
で暫く見る。冬物マント大見切
りで三五円とのこと、一着買う。
帳簿整理後、又米田へ行く。

▼六月五日

起床七時、朝三時頃から早や
薄明りで、一番日の長いときだ。
今朝は珍しい寒さで霜が下り
た。薄氷も張つたとのことだ。リ
ンゴも、49号がいよいよ花が咲
き始める。今朝の寒さが花にさ
わりはせぬかと案じている。自
転車で土場の小林、㊦などへ行
き、リンゴの袋はりのことを依
頼する。菊地船頭と長谷川の二
人で、新地に揚げてある丸竹一
三個を磯舟で浜へ運んで来た。
一〇時、自転車で行き、㊦

干場で消防演習を見る。天気は
良いし、広々としたところで見
物した。全に寄つて暫く話を
し、ヨ、田に寄る。長栄丸が美
国へ行くので、アバ縄一〇丸積
み込んだ。夜は㊦で部落会の会
合がある。一〇時半散会。星が輝
き寒い夜だ。熊木へ網二〇反、種
金へ小網用のアバ縄を売る。

▼六月六日

時化、三穂丸でエビス縄五〇個
着いた、と全から早朝電話があ
り行く。小雨が降り出したので
見合せて帰る。午後から、畑方
面へ掛け取りに出かけたが、雨
がますます強く降る。若林のと
ころへ寄り暫く話をする。後、金
沢、ときわ石屋などに寄る。夜、
太鶴間に行きいろいろ話をす
る。羽生さんが酒に酔い暴れて
いるというので大騒ぎ。巡查が
来るやら、ヤジ馬で賑やかだ。酒
ぐせの悪いというのは困つたも
のだ。

▼六月七日

起床七時、天気快晴。熊さんと
鎌田さんは農園へ行き、切つたり
リンゴの枝の始末をする。出面二
人で薪割りをする。私は店番。美
国㊦が来て、イワシ網用のガラ

ス玉など運んで行く。町では呉
服屋の売り出しで人出がある。
困では店で蓄音機をかけたらし
て賑やかだ。丸竹が沢山入荷し
たので三か所に置き、値段を決
める。全から先のアバ縄五〇個
を荷受けし、ヨの倉へ入れる。
五時頃農園へ行く。58号はまだ
花が咲かないが、旭、14号、49
号などにスムシがポツポツ見え
る。しかし、昨年程甚だしくはな
い。半作ぐらいにはなるだろう。
この頃小網で、全、全がマス、
ホッケが大漁。市況は少し安値
のようだ。海産物や肥料などは
景気が思わしくないので、どう
も海産商はさえない。

▼六月十一日

今朝、小樽から八時一五分発
の汽車で余市に向かう。余市は
祭礼で賑やかだ。リンゴ屋二軒
に寄り、リンゴの袋の値段を問
い合わせた。五万枚程買うこと
にした。一二時半発の富丸に乗
る。預けたトランクが見えぬの
でいろいろ調べたがわからぬ。
困つた。

▼六月十二日

昨日行方不明になったトラン
クのことで、余市の甲谷へ電話

をして見たが不明とのこと。困った今、保木、⑤の回漕店へ問い合わせせてみても不明。銀行の用事が済み、帰ってから、沖村女鹿さんまで行き、余市で預けたときの様子を聞き、帰ってから横山のところへ行つてまた様子を聞いたが、確かにはしけに積み込んだとのこと。手掛かりができたので勢いづき、美国市川へ電話で問い合わせたらあるとのこと。先ずは安心した。

どんなに心配したか知れぬ。五〇円はもうかった。このことで、今日は一日中仕事も手につかんだ。

▼六月一三日

起床六時、今日は古平小学校の運動会、子供等は五時頃から起きて大騒ぎして喜んでゐる。妻は昨日からいろいろ支度で忙しい。一年中で一番楽しい行事だ。古平中の人は皆大騒ぎだ。七時頃から小雨が降り出したので心配したが、その後は晴れた。私も一〇時頃、悦三を連れて見に行く。雨も上り、日も余り照らずの上天気だ。自分達の小学校時代も、やはりこのように無邪気で面白く遊んだものだが、昔も

今も変わらぬものは懐かしい。昼食は③で小屋掛けをしたので、三〇人程もそこに集まり食べた。皆大喜びだ。午後も近年珍しい程の賑いであつた。四時頃終了した。

▼六月一四日

起床七時、昨日の運動会は実によい日和であつた。町民の誰もが待ち望んでいた運動会も、無事に終わったことは大いに喜ばしい。運動会も一年ごとに盛んになる。学校は昨日の疲れもあるのか、九時に始まるというので子供達ものんびりしている。私は留守中の帳簿や書類の整理をする。例のトランク、今日美国から届いたのでまず一安心。熊さんはスムシ取りだ。スムシもだんだん出てきたというが昨年よりは少ないという。リンゴも四分作ぐらいはいくだろう。サクランボは豊作という。青森からリンゴ袋の口どめ用の金(おむ)を売りに来たので、二〇余円で約定した。海産物では鰯、魚粕が暴落、当地の商人でも大打撃を受けたところもあり、内地まで急ぎ出張した者もあるという。先には暴騰し、今度は

暴落、実に危険なことだ。

▼六月一五日

起床七時、店は閑散。浜方も鰯製品が一段落したが、値段の方は暴落で寂しい。出稼人も沢山町を出て行つて寂しくなつた。

八時頃、△へ行つて主人に会い、本年の大謀のアバ縄など売り方について頼んで来る。その後、新地方面へ行き、銀行、△などに寄る。貸し方の大口で二〇〇円余りのところ、五〇円を受け取る。残りはちよつとむつかしいようだ。聞くところでは、女性問題で家の中も大騒ぎになり、債権者に押しかけられて、せつかくの大漁もメチャメチャになつてしまったとのこと。慎むべきことだ。正午頃帰り、午後から小林、△、②、その外と④公園へ行き、ビール、サイダーなど飲食の後、あちこち見ながら三時頃帰る。節句も近づき、方々で鯉のぼりが見える。

▼六月一六日

起床七時、熊さんは、出面二人と共に農園でスムシ取りだ。昨年程ではないがボツボツみえてゐること。節句が近づき、どこの家でもダンゴにする粉たた

きをしている。私は貸し方の請求に行く。海産物の下落、鰯粕の大暴落で大恐慌を来している。

▼六月一七日

起床六時、だんだん気候も暑さに向かうようだ。火防組合で巡回をする。私は二条、三条通りを受け持ち個別に回る。今日は□□(三葉節句)なので、どこの家でもダンゴをこしらえている。鯉はちよつどよい風にゆられて節句気分。午後一時半、富丸で中西代議士等百余名が△の浜に上陸する。有志三〇余名が出迎える。吉井で休み、会場の禅源寺へ行く。会場は満員、中西代議士は中央政界の実状を述べ、我が国の外交の失敗により、社会主義のますます全国に宣伝されることを痛感させられた。後、鉄道問題について話されたが、話はわかり易く、なかなか立派な人だ。五時半に終了、七時から美登利で歓迎会があり行く。一〇時に終わる。

▼六月一八日

昨日来の暑さはまさに暑中のようなだ。裕(あせ)を着ているが、扇子がほしいようだ。久し振り

に悦三をおんぶして浜に出て見る。浜はすっかり寂しくなった。鍊製品が下落して積取り船も入港していないので、はしけも馬車屋もヒマで、町もひっそりしている。子供達は暑いので海水浴をやっている。今日は五月節句(旧暦の五月五日)で、町では鯉のぼりが上がって賑やかだ。中西代議士は、この日の公園に招待され、困主人等と馬車で行く。私は平田、小林さん等と一〇時頃、電気会社の電気風呂に誘われ、初めて入ってみたがなかなかよいものだ。昼食後、農園へ行って見たが、リンゴは初めの予想より大分悪いようだ。サクランボはこの分だと豊作だ。一時頃帰り、銀行、入船町方面を回り、田で酒肴を馳走になる。夜、若林主人が来ていろいろ話をする。文治と幸治は、新地へ活動写真を見に行く。

▼六月一九日

今日も暑くて夏のような。畑はこの分だと生育も良いだろう。リンゴは昨日見た様子では半作ぐらいと思っていたが、どうも思わしくない。午前中困へ行く。若林さん、困主人、支店

主人などが集まり、今回の鍊粕の暴落について善後策をいろいろと協議する。今月初め一〇〇石三六〇〇円、三七〇〇円で買ったものが、今の相場で三一〇〇、三二〇〇円に値下がり、手持ちが三、四、〇〇〇石はあるというから損害も莫大で、これでは大恐慌である。午後、原田さんへ火防組合経費集金のことについて相談に行く。今年は町内戸数割りだが、私のところでは一等級上がったが仕方ない。夜九時頃、三〇分程停電になり不自由であった。

リンゴの品種と番号

リンゴは日本でも古くから栽培されていましたが、本格的に栽培されるようになったのは明治になってからで、明治初年、開拓使などによってアメリカから輸入されました。

明治五年、開拓使から古平にもリンゴ苗木が下付され、チョペタンの沢に植えられました。その当時の樹が一本残っていたのですが、清岡団地造成の際に無くなってしまいました。

▼六月二〇日

ずい分暑くなった、まるで土用のようだ。熊さんは出面三人とスムシ取り、リンゴ作りもこの頃は思わしくないとして、外のところも元気がない。九時頃沢江へ行き、団齊藤へ寄ったら網六〇〇間程入用とのこと。七円五〇銭まで勉強することにした。全笹谷にも寄ったが、某店では安く注文を受けているとのことだが、まだ契約はしていないとのこと。客とのかけ引きでずいぶん安くしたようだが、果たして実際はどうか。川畑にも

明治初年、アメリカから苗木を何種類も輸入したとき、英語では分かりにくいので順に品種ごとに番号をつけましたが、輸入された多くの品種の中でその土地に適応したものだけが残っていて、その時の番号で呼ばれているわけです。

しかし、番号ではどうもリンゴにふさわしくないというので、地方によっていろいろな呼び名がうまれました。ところが今度は、地方によって呼び名が違うため混乱が起きました。

寄り話をして帰る。午後から自転車で新地方面へ、それから群来村へ行く。天気は良いしナギで、実に気も晴れ晴れする。熊本に寄り網代五〇余円を受け取る。話をし長谷川、七、正、相内などにも寄る。刺網はまだ買っていないが入用とのこと、秋までには専心売り込みに努めねばならぬ。港町、浜町で本年のイワシ網の模様を聞く。相当の漁があったとのこと、一〇〇間程の注文を受ける。明年あたりから盛んになるようだ。

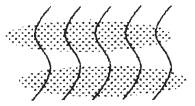
— 続く —

そこで協議して、協定した名前に統一したので、番号で呼ばれていた主な品種の名前は、

6号Ⅱ紅玉	9号Ⅱ青龍
12号Ⅱ紅紋	13号Ⅱ白龍
14号Ⅱ祝	19号Ⅱキング
24号Ⅱ君ヶ袖	33号Ⅱ緋の衣
49号Ⅱ国光	58号Ⅱ紅魁

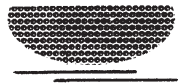
その後も輸入や、国内で改良された優れた品種が育成され、現在ではミカンに次いで国内第二位の生産をあげています。

ミカン 一四五万トン
リンゴ 九三万トン (一九九)



モーニングコーヒー

大澤 文子



厨辺にふつふつとほろ苦いコーヒーの香がたつ。テーブルの片隅には朝刊が二つ折りのまま。小花模様のカップに匂いたつコーヒーをそそぐ……と、私の一日が始まる。

ザラ半紙に走り書きしておいたものを清書、その他の郵便物と、朝早に郵便ポストへ向かうのが常だった。「ポトン」かすかにポストの底へ落ちる音をたしかめ、急ぎわが家へ戻る。それが、私の日課のようにな

った。
「ペーリーショップヤマダ」店前のポストまでは数分で行ける距離でよかったが、今はその跡地に三階建てのマンションが建ち、ポストも移動されてやや遠くなった。

まあ朝の散歩のため……と思えば文句も言えないが。

あの頃はいつもヤマダ店前のポストまで行くと、きまつて店内からフツツとほろ苦いコーヒーの香が漂ってくるのだった。あらアこんなに早い朝なのに

もうコーヒーの客が？ と不思議に思うこともたびたび、いつか私もコーヒーの甘い香に誘われ、そつと足を踏み入れてみたのだった。

お店の右側のカウンターの隅には、涼やかなブラウスの若い女性がひとり、コーヒーカップ片手に店の女主人と話してこんでいた。

「あらアいらつしやい！」

女主人の声にふと振り返ったその女性は、立ち上がると見知らぬ私にさえ、

「お早ようございます」

と、爽やかな挨拶と笑顔を向けた。あわてて私も挨拶と笑顔を

お返ししたが、ふと思った。
「こんなに早い時間にひとり

モーニングコーヒーなんて、きつとお勤めの早いご主人を見送られたあと、ひとときの安らぎと、幸せを味わっているのだろうか、なんてムードのある若いひと、詩でも書いている女性かしら――

一瞬、たわいのないことを思

いながら、そのひとの左側の席についた。

「時にはねエ、お母さんと連れだつて見えることもあるんですよ」

怪訝な顔をする私に向かつて店の女主人が教えてくれた。

「美容院へも連れて行かれるんですよ」

と、また店の女主人は感心したようにつけ加えてくれた。いつか私も朝早に彼女と並び、コーヒーカップ片手に話しこむ日が多くなった。

「何か訴えるような澄んだ黒い瞳、下げた前髪が挨拶をするたび小刻みに揺れる。やせ型でやや小柄なひとではあるが、キリツとしまった口もとが何かしら理知的に見え印象的だった。

「わたしネエ、ウメダエイコつて言うの。私が生まれた時、父が『英子』ってつけてくれたの、この子だけは英語がうまくなる様につてネ、ウフ……」いたずらつ子らしく首をすくめる英子さん、

「でもダメネエ、父にそむいて悪いけど英語が一番苦手だったの」と、また笑う。

それからたびたび母親の手をひき買ひ物……それとも散歩の英子さん母子に出会い挨拶を交

わす私だったが。
数か月経った頃からであったろう。

例のコーヒー店の香が漂うこともなくなつた。店の女主人ともども心配して、眉をひそめる日々がつづいたが、
「きつとね、ご両親のもとへ越して行かれたんでは？」
と女主人は言う。

「きつとそうね」
私もそのように思い、母子さん達の健康をかねながら祈つていたが……。

それから数か月経ち、凍てつく寒い朝だったが、私は所用のためバスに乗った。

ふと、窓から外を見た瞬間！
わが目を疑った。

いつもの赤いジャケットを着た英子さんらしい女性が、急ぎ足で道路を横ぎつて行くのが見えた。ハツとしてガラス窓を手で拭き、

「あら！ どこへ行くの！」

心の中で叫んでみたが、通じるわけもない。ましてバスの中の私を見かけるわけもない。

「きみはいまいつ辺の茶房に席とりてコーヒーに酔ひしか幸せに居よ――

その夜更け、わたしはペンを走らせていた。

松前藩が戻る

本州に移されていた松前氏も、蝦夷地への復領運動が実を結んだのか、また、幕府もロシアとの緊張もゆるんできたことから、蝦夷地での多少の利益はあったものの、蝦夷全島を松前氏に返すことにしました。

たまたまこの年(文政四年・一八二二)、それまで不漁だった鯨が福山地方で大漁となり、漁師達は「殿様が戻ると鯨も戻る」と言うて大いに喜んだといえます。

松前藩は復領すると、それまでの場所知行を廃止して、全島を藩の直轄としました。また、藩校を創立して人材の養成を図り、蝦夷地の警備も強化しました。

また、天明年間(四〇年ほど前)にあった東北地方の大飢饉で、松前藩の禁令をよそに多くの人々が蝦夷地に流れ込み、神威峠が女人禁制であったことから、その南の岩内・古宇・磯谷・歌棄・島小牧に和人の集落ができ、特に岩内などは急激に人口も増え、その後は五〇〇〜六〇〇戸

の市街地となりました。

これは松前地が、鯨不漁の影響などもあつて人が集まりにくかつたのに、蝦夷地の方では鯨漁も盛んで、藩の禁制からも逃れやすかつたというのもその理由だったようです。

そのほか松前藩にとつての難問は、ロシアばかりでなく諸外国との問題でしたが、これらは同時に日本のも問題でもありました。

——蝦夷地から北海道へ—— 地方自治の移り変わり

でした。

その頃松前藩では、武芸にも優れ、名君と評判の崇広(たかひろ)が藩主となり、藩も活気に満ちていました。崇広は外様(ときま)の小大名でしたが、幕府寺社奉行・海陸軍総裁、そして、老中格から老中にもなった人物でした。松前藩にとつては対外的にも騒がしい時代であり、海岸防備のため、この時代には珍しく、幕

府から異例の福山城の築城を命じられました。古い城を壊して、砲台七座を備えた新しい城が完成しました。

ところがこの年(安政二年・一八五四)、幕府はアメリカと日米和親条約を結び、下田と箱館の二港を開港することになりました。

ペリーの艦隊は早速箱館港の

調査に来航しましたが、これは今までの鎖国政策を破ることで、松前藩や住民にとつてはまさに大事件でした。

知らせを受けた松前藩では箱館警備に兵を出すと共に、住民に対してアメリカ人が来航した際の心得書を出しました。

それには、見物することの禁止、海に面した戸や障子の目張り、酒をかくすこと、仏事などの禁止、婦人・子供を山手に疎開させること、アメリカ人が日用品などを求めてきたときのとるべき処置など、こまごまと注意を与えています。

住民は荷物などを車に積んで近くの村へ疎開するなど、大変な騒ぎであつたと当時の記録は伝えています。

箱館の開港

日本の北の端にあつて、昔は蝦夷ヶ島といわれ、社会や文化の恩恵から遅れている辺境の島である、ということしか、それまで蝦夷地については知られていませんでした。

古くからオランダ・清国と行き来のあつた長崎を除くと、下田と箱館は近代ヨーロッパの文明と接触する日本でただ二箇所の港となりました。下田は間もなく開港場でなくなりましたが、箱館はその後開港場として発展したことが、日本の最東での地といわれた蝦夷ケ島が、明治以後急速に発展する転機になったとも言えるでしょう。

箱館は日米和親条約の結ばれた翌年から開港され、薪や水、食料品などを供給するようになりましたが、後には石炭も供給するようになり、これによつて岩内の茅沼炭鉱での石炭探掘も始まりました。

ペリーの来航にやや遅れて、ロシアの使節が軍艦四隻を従えて長崎に来航し、国境の画定と貿易を求めて来ました。ところがその間に、ロシア兵が樺太の久春古丹(クシニコタン)を占領して、松前藩が派兵するという騒ぎがありました。

しかしちょうどその頃、ヨーロッパでロシアが戦争になり、兵を

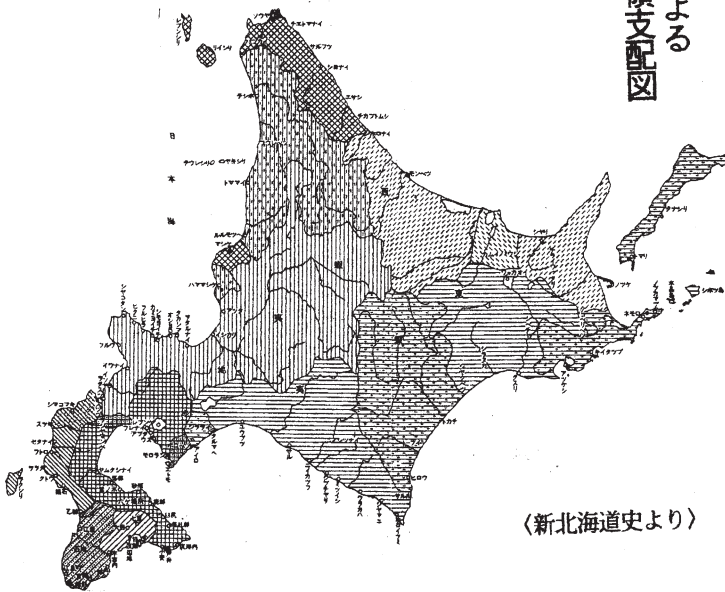
撤退したことでこの事件は終わりましたが、ロシアの南下政策はカムチャツカ・千島方面から樺太へと転換しつつあったのです。

その後、日露通好条約(和親条約)が結ばれ、この条約で、国境問題は千島については択捉島と得撫島の間を国境とすることに決まりましたが、樺太については一致をみませんでした。

安政元年、幕府は箱館開港を

奥羽六藩による 分領支配図

 松前藩領地	 同警衛地	 庄内藩領地
 同警衛地	 会津藩領地	 同警衛地
 南部藩領地	 同警衛地	 津軽藩領地
 同警衛地	 秋田藩領地	 同警衛地
 仙台藩領地	 同警衛地	



(新北海道史より)

決めると間もなく、箱館付近を松前藩から返させ、箱館奉行を置いて広大な蝦夷地の警備に当たらせました。そして翌年には東は木古内から東、西は乙部村から北の全蝦夷地を直轄にして、これを箱館奉行の支配下におきました。

松前藩はその見返りとして、奥州梁川付近を領地とする三万

石の大名に昇格したのです。

東西蝦夷地や北蝦夷地(樺太)の警備については、松前藩のほか仙台・南部・津軽・秋田の四藩に分担して警備をさせましたが、その後、会津・庄内を加えた六藩に蝦夷地を分けて警備をさせることにしたのです。

箱館にはアメリカ・ロシア・イギリス・オランダ・フランス・プロシアなどの領事や関係者が赴任し、通商条約にもとづいて、安政六年、箱館は正式に貿易港となりました。

もともと開国は、日本に住んでいる外国人を対象に考えた貿易でしたが、箱館での貿易は極めて積極的なものでした。

長崎倭物(たわらもの)といわれた蝦夷地の特産物であるイリコ・千あわび・こんぶなどが、外国船によつて直接、清国へ輸出されることで、それまで独占体制であった長崎会所から訴えられる事態にもなりましたが、直接輸送することが経費の節減にもなり、適正に行なわれていれば問題はないとされました。

(続く)



札幌通信 第24信

天災に想うこと

吉川 義雄



光り輝く青葉の五月、その日は朝から強い南東の風が吹いていた。

正午も近い頃、誰かの「火事だッ！」

の絶叫が役場の中に響き渡り、窓からはもう相当の黒煙が、丸山の春の色を隠して渦巻き始めているのが見えた。

昭和二十四年二回古平の大火から、あつという間に五十五年の時間が経っている。

被災の内容こそ異なるが、度重なる列島を襲う風水害、そして今度の新潟県中越大地震の、生涯見たこともない惨状、いつ止むのか知れない余震の怖さの中での生活。

古平大火のとき、戦後の各自の生活さえままならない時期のとき、各地からどれ程勇気づけられるご芳志を頂いたことか。

何もかも無くした身に、着古

した衣類一つにも人の心の暖かい温もりを感じて、嬉しかったことを覚えていいる。

テレビのニュースを見て感ずることは、阪神・淡路の災害で苦しんだ方々や、九州、四国での風水害を体験された方、その他、大なり小なり数度にわたる天災に遭われた苦しみの体験者たちが、わがことのような気持ちで暖かい支援に立ち上がっていることである。

冬の厳しさがやってくる。長い時間が必要と思われるが春は必ずやってくるもの、本当に立ち上がるのは、結局、自分の力以外にはないものと決めて、雄々しく立ち上がっていただきたい。心からお祈りする。

『天災は忘れた頃にやってくる』という名言がある。

ハラハラしながら氣遣っていた、二十世紀の大国同士の冷戦

があつという間に解消し、当分戦争はないものと安心していたら、今度は、別な形の人災が次々と地球上に起きていいる。

深い次元から見れば、宗教戦争という始末の悪い、タチの悪い殺し合いの人災が牙をムキ出して襲っているのだ。

地球温暖化による度重なる大型の台風など、英知を尽くして、各国の代表が話し合った末に決めた京都議定書に調印し、正直に守ってゆけば人災は防げるはずだ。

ロシアがやつと調印し、曲がりなりにも発効することになった。それでも大国アメリカが、自国のエゴだけで知らんふりである。

人災の尻ぬぐいに、イラクに自衛隊を派遣するだけに見える小泉投手は、仲良しを強調するブッシュ捕手に、世界の為になる最高の効果ある球を投げてほしい。いくらサインを出されても、言うがままにデットボールの愚を繰り返してはならない。

同じ災害に見えても、古平の大火は明らかな人災、戦争と同

一に見られぬこともない。天災に見える地球規模の災害を、好きなように、人間の欲望のままに取り崩した結果によるものが多い。

地球を守るオゾン層とやらも、以前と比べ、北極上空ではもう取り返しの出ない程大きく穴があいているという。

自然も、そこで生きるしかない人間の営みを、遙か二千年百年前にインドに出現した釈尊は「環境も人間も一体である」と、「依正不二」の大原理を人々に示し、宇宙に浮かぶ美しい地球を大切にすることを教示している。それどころか「五百塵点劫」という長遠な昔から、この美しい地球に何度も何度も生まれて来た体験を語り、現代に残る経文(法華経)では、十界互具・一念三千など、地球上で生を営む(特に人間)総ての生命に係る大原理を示している。

仏法のうち、小乗教程度の哲学しか持たぬ世界の指導者が多いうちは、「災害は忘れた頃にやってくる」覚悟が必要かも知れぬ。

連作

古平・もろて

坂本 甚衛

— 地底からの声 — 3

中語では昔、風水術の見地から墳墓の地を定めるのに、天文・地気・方位等を考え合わせて、墓地は最も見晴らしのよい地域に造られたという。その思考法からすれば、ここ古平でも最良の場所を選んで墓所を決めたといえるかも知れない、と私は思った。

墓が並ぶ一番上方まで辿り、叢(き)に腰を据えて開けた斜面に目をやった。小さく海が見えた。頭上には飽くまで碧い空がある。見上げているだけでも、計り知れないほどの深い久遠がある気がした。暫くしてゆつくり立ち上がり墓石の間を巡る裏面には、「鎮魂の詩、開拓の思いを神にゆだねつつ、今日も祈るや一条(ひとすじ)の路、黎明

墓石の中には一風変わった個性のあるのがたまにあり、興味を惹く。寺坂家とある墓には「海と山、静かなる松韻の風」とあって、爽やかで清々しい。

同じく墓地の奥手にある甲野家の墓石は、現代風の横形四角形で「空、海、地」とあり、こちらにもいささか斬新に思える。

また、少し長つたらしいが、「一九八三・八・一五、社会福祉法人古平福祉協会建立」の『黎明の里、縁故車の霊』とある裏面には、「鎮魂の詩、開拓の思いを神にゆだねつつ、今日も祈るや一条(ひとすじ)の路、黎明

の里に縁あり人、今人生の徳をつみ定め果たせり、御み霊(たま)みどりの岡を見上げる墓地に在りて、更生の汗を流せし同胞(ひとたち)を守り静かに眠れり、とこしえに、とこしえに……

一九八三・八、共働きの家施設長 辻田十三夫、指導員 菅原澄江」とあるは、恐らく共働の家で学び、働きつつ物故した人々を祀ったものだろう。

その直ぐ斜め向かいの墓誌：裏面の言葉が私を捉えた。「逢いに来る子孫のお子を幸として、ここに鎮まり此処に眠らむ、優子」とあるは、故人が天国から切ない願望を込めて残したメッセージか。それとも、現世に止まった身内の一人が故人を偲んで記したもののか。私には知る手立てもないのだ。か細い琴の音にも似た清澄なある意志が、第三者の私にも一抹の残影を誘う気がしないでもなかった。瀧内家の墓だった。

他にも捜せば感銘を受ける墓

碑銘は幾つかあるだろう。しかし、歩行に余り自信のない私は照りつける残暑の陽光に堪えかね、早々に下山することにした。

多分、終(すゑ)の栖(すみ)となるであろう古平で、私は路傍の傍観者であろう。この墓地にしろ、眠っている霊の殆どが生前、会話も交わさず私の知らない人々に違いない。だが知っておればとて何んになる。

人間とは、死んで終えれば一片の無機質な骨と化して石碑に姿を変え、もの言わず佇立するだけだ。半世紀前の一時期、滞在していた折に見かけた町内の人々の多くも、現在は見ることもさえない。その大半はすでに鬼籍に入つたということか。

この度、引越したのなら、いの一に逢いたいと思つていた年上の友人も、訪ねてみたら姿はおろか、家さえ無くなつていた。古平に生き、そして死んだ男女の一生を端的に証明 ←

中 戦

泣き笑いの
樺太漁場体験記

戦 後

吉 野 慶 一 郎

手料理で 公演も終わり、緊
の懇親会 張感から解放され
た安堵感と、そして、まだ冷め
やらぬ興奮もどこに残ってい
ました。

一日を振り返ると、今日はい
いことばかりだったようで、明
るい気持ちで後片付けを終えま
した。それぞれが持ち寄りの材
料を女子団員が手際よく調理し
、手料理でのさやかな反省慰
労会を開きました。M隊長から

のウイスキーで乾杯し、お互い
の労をねぎらい称え合い、和や
かに歓談しながら成功を喜び合
いました。

運命の出会い その歓談も半ば
いと別れが ばで大いに雰囲気
気も盛り上がったいたそのとき
でした。先生方から突然、意外

なことが話されました。

「皆さん方には大変お世話にな
りました。今日の公演も大成功
で無事に終了することが出来ま
したので、これを機に自分達は
元の住所に帰ることにしまし
た。残念ですが、今日でお別れ
させていただきます」
との挨拶には、一同、ただただ
驚くばかりで声も出ませんでした。

逢うは別れのはじめ——と
はいうものの、やはりそのとき
がついに訪れたのです。

思えば、敗戦直後の混乱の中
で、偶然にも見知らぬ者同士が
音楽が縁で結ばれ、ひとつの夢
を追って苦楽を共にして来たの
です。この人達との別れはまこ
とにつらいけれども、明日が見

えない運命の下にある自分達に
これを引き止められる理由もな
く、改めて敗戦の悲哀を痛感す
るばかりでした。

楽しいはずの慰労会は、一転
して何か寂しい送別会になつて
しまいました。名残尽きない話
で時の経つのも忘れるほどでし
た。最後は、

「今度は故国日本の地で、きつ
と再会を信じて共に頑張りまし
よう」

と苦い乾杯、寂しい笑顔での握
手でした。

いずこの地でか 送り出した
再会を期して 戸外は月も
星も見えず、晩秋の厳しい冷氣
が身を刺すようでした。

明日にも迫り来るかも知れな
い樺太の冬の猛威、冬將軍の襲
来の前触れか、気がつくとも粉雪
が降り初め、道を行く人達の肩
に散っていました。

寂しい別れの光景となりまし
た。振り返り振り返り、遠ざか
る姿を街路灯の淡い光の下、雪
の彼方に去った行くのを半ば夢
うつつで見つめていました。

する無数の墓石を見て、私は
ひとりの傍観者でしかある
まい。

帰路、舗装路を下りなが
ら、待てよ……と、ある疑問
が脳裏に弾けた。

われわれ人間は親や子、ま
たは兄弟といった親しい係累
の亡骸(なきがら)を目前にする
と、しばしば取り乱して号泣
する。

しかし、不思議なのは、赤
の他人の死体を見ても取り纏
るはおろか、身をのけ反らせ
て逆に関心を持つまいとす
る。故意に離れようとしたり
する。甚だしきは興味本意に
見つめた挙げ句、終いには嫌
悪の情さえ抱く者としている。
そこに血族意識というか「死
」或いは「死骸」に抱く、象徴的
な意味合いが隠されているし
まいか、との気がするがどう
であろう。



師団長の連隊視察・続き

師団長は階級が中将なので、《海行かば》を二回連続して吹奏するが、早いテンポの曲で一氣に吹かねばならず、二回連続しての吹奏は大変な肺活量を要求される。とにかく立派に任務を果たさなければと、毎日、夕食が終わるとラッパの練習に励んだ。

とうとう衛兵勤務の当日となった。大隊本部前に各中隊から選抜された兵隊が集合した。

衛兵司令は下士官候補出身の若い伍長である。そこで大隊副官から訓示を受け、連隊本部前に隊伍を組んで集結をした。

私達の連隊は敷地が広大なため塀や柵がない。

そのため衛兵所は正門の外に二か所ある。今日は正門の本部衛兵所のラッパ手で、師団長がお通りになる衛兵所である。

私達は師団長がお出でになる

大分前から整列して、今か今かと待っているがなかなかお見えにならない。若い衛兵司令は相当地に緊張しているようだ。週番副官が見るに見かねて、師団長への敬礼の指揮はわしがとるからと指揮を代わった。

やがて午後三時頃、師団長は乗用車で、護衛の兵隊と将校はトラックで正門から入って来た。

週番副官の「師団長閣下に敬礼つかしらア

ー右ッ」の号令で私は《海行かば》を二回連続で演奏したが、どうやらうまく吹けたようだ。

私も大分緊張していたので、や

つと肩の荷を下ろしたような気分になった。

それから師団長は連隊の将校全員と会食されて、夕暮れ時にお帰りになった。

私も再度、衛兵所前に整列し《海行かば》を吹奏してお送りし、これで無事に大任を果たすことができた。

第二回冬季演習

昭和二〇年三月頃、第二回目の師団の冬季演習が行われた。

仮装の敵は昨年同様にな敷香の要二四二部隊だ。私はまたまた連隊本部からラッパ手として指名があり、連隊本部の指揮班に編入された。当日は気屯駅から汽車に乗り、上敷香駅の分手前で下車したような記憶がある。

各中隊の兵隊達は防寒具を身につけ、三日分の食料を持ち、完全軍装なのでかなり体に負担がかかる。それにスキーをはいているので、スキーが不得意な者は二重の苦しみとなる。

私は連隊本部の馬そりに背囊(はこ)を積み込んだので身軽と

なり、持っているのはラッパと小銃だけで、小林連隊長の傍にいてラッパ吹奏の命令を待ただけである。連隊本部はあまり移動はしない。各大隊や中隊は雪道を歩き、一日中歩きつくめバテ気味だ。

連隊本部の兵隊はよく伝令に出されるが、私は何もしないで悪いような気がして伝令を志願してみたが、自分でもあきれる程の方向音痴であり、伝令を志願してえらい目に合う羽目になった。

砲隊か、どこであつたか忘れてたが、そこへ伝令に行つて帰り道がわからなくなり、雪の森林の中で迷子になつてしまったことがある。

うろうろしているうちに日が暮れてしまい、わずかな雪明かり、一人ぼっちで茫然として森林の中をさまよっているうちに、幸運にも、突然大きな道路に出た。そこは連隊本部のいた場所だったが、今はどこかへ移動してしまつたらしい。

「しまった！」今さら後悔してもあとの祭りである。(続く)

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

24

橋

義 春

教科書のいまゝむかし

◇明治以前の教育

これまででは、今から考えても意外なほど教育が進んでいたといわれる江戸時代後半の教科書から、当時の子供たちの勉強ぶりを見てきました。そこには、藩校による武士の教育と庶民のための寺子屋という、大きく二つの流れがありました。そして、武士と庶民というはつきりした身分による差別がありました。とにか、このような教育機関が多く出来たということは、徳川幕府の学問重視の政策にあったことは確かです。

世の中が落ち着きだんだん産業も発達してくると、そうゆう時代に遅れないようにと、多くが、自主的に寺子屋を通して『手習い』の教養を身につけるようになりました。

◇近代の学校制度

このようなことが、明治以後の、学校教育の目ざましい発展につながったといわれている理由の一つです。

やがて明治維新となり、時代は大きく変わり、明治新政府にとつての最大の課題は『富国強兵』ということでした。広く世界の情勢がわかってくると、教育もこれまでのようになた『読み・書き・そろばん』だけでは発展がなく、それには新しい学校を作つて国民の教育水準を高めることが急務となってきました。

そして教育制度については、明治元年からすでに取調掛を任命して計画に取りかかっていました。が、当時はまだ維新後の動乱が続いていて、全国に学校制度を実施できるという状

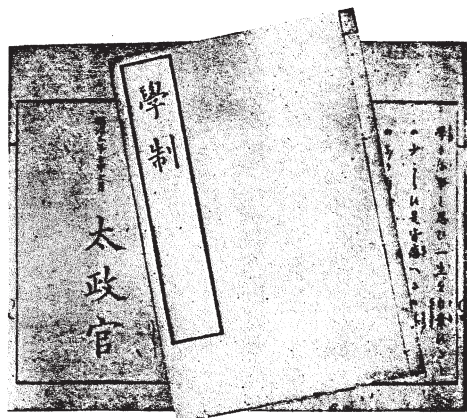
況ではありませんでした。

明治三年に『大学と小中学規則』が発表されましたが、これとは別に、府県に小学校を設置することを指示しています。

それには、小学校は庶民の子供に日常生活に必要な読み・書きを教え、時勢の変つたことをわからせ、人の道や道徳をわきまえた国民となるよう教育を行なう学校である、とあります。

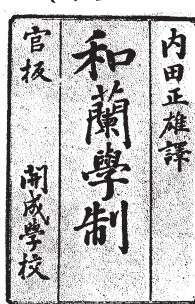
このように寺子屋のような学校と、指導者を養成する大学と結びついた小学・中学という一つの学校の系統をもつて制

←『学制』明治五年(二七二八月三日公布されました



←『学制』に当たつて参考とされた諸外国の翻訳書

(オランダ)



明治六年九月刊行

佛國學制

文部省

(フランス)

度化しようとしたようです。

しかし実際には、明治四年に文部省が設置され、一二人の委員の審議によつて学制の大綱が決められ、さらに論議された上で明治五年に学制の發布を見ることになりました。

この新しい教育制度を実施するに当たつて、遠大な教育への目的が述べられています。



短歌

吉平町岬短歌会

くつきりと見ゆる山並み初雪を消して大きく虹かかりたり

池田 テル

鮭の時期終はり静もる河口辺にゴメの大群みな海向きて

鈴木 時子

晩秋の露路に一輪鮮やかに咲けるタンポポ名残り惜しげに

田中 香苗



吉平俳句会

秋天へ吸込まれゆく観覧車

斉藤 波留

古の錦絵なりやもみじ山

山口 悦子

雨しづく報恩講の鐘渡る

越野 敏雄

何時までも句を究めんと癡祭忌

大和田 絵伊

紅葉にもそれぞれ色の残りけり

高橋 重子

早起きも一卜日を長く使ふ秋

仲谷 比呂古

蛙躍る川に湧き立つ人と竿

室谷 弘子

夕光の中流れゆく千切れ雲鉛色なれば明日は風か

竹内 コト

肺臓を永病む妻にこの茶碗重いと言はれ三度替へにき

寺内 りょう

うら成りの南瓜捨てある山畑のえのころ草の穂もすたれたり

東 美知

貴船菊くきやかに影地に揺らす音のかすかに黄昏ゆけり

堀 典子



初雪や夜の報せにタイや替え

泉 清三

紅葉が湖畔を染めて暮るる秋

外山 俊久

行秋にはぐれし雲のたゞひとつ

渡辺 嘉之

秋海や波どめを蹴る波の音

堀 典子

秋晴や思ひ思ひの雲の地図

越野 清治

【福井幸平さんを追悼】

すでに皆さん周知のことです

が、去る十月二十日《せたかむい》と歩みを共にされてこられた福井幸平さんが永眠されました。発刊から往時の回顧談や、ユーモア溢れる話題で健筆をふるわれました。永年にわたるご支援に深く感謝し、ここに生前をしのび、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。次の一句が最後の遺作となりました。

—— 当丸の峠の深き紅葉谷 ——

古平町史年表

昭和10年(1935) ~続く

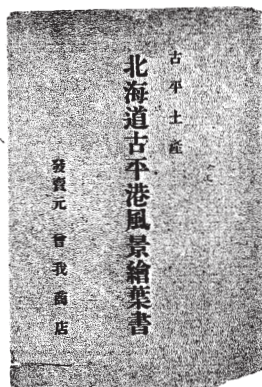
- ▲特別教育規定により、稲倉石尋常小学校が単級(1学級：児童数16人)で開校、古平尋常高等小学校長竹林源次郎が校長を兼務する。
- ▲武田典町長が家庭の都合によるとして辞表を提出する
- ▲町長代理として助役北浜嘉雄が任命される
- ▲古平・美国・入舸・余別の4か町村が、古平～余市間自動車道路の建設について道に陳情をする
- ▲古平信用組合が灌漑溝組合の債務についての委任を受ける
- ▲漁村振興後志水産共進会が寿都町で開かれる
- ▲積丹半島が景勝地としての指定を受ける
- ▲鉄道省建設局囑託子爵新庄直知一行が、鉄道敷設請願の件について余別村まで視察する
- ▲帝国水難救済会総裁から町内の3人が賜餐(位のある人から食事を賜る)の招待を受ける
- ▲防空演習が行われ、各家庭では灯火管制を実施する
- ▲町で最初の道庁補助船として、第二勝栄丸(岩崎定勝所有)が進水する
- ▲すけそ延縄業者と底曳漁業者との紛争防止調停会議が行われる
- ▲国勢調査が行われる。
古平町の戸数 1,438戸 人口 7,485人
- ▲古平すけそ漁組合(組合長大谷留蔵)が設立される
- ▲町長代理・助役北浜嘉雄が退職し、後志支庁庶務課長の谷川喜市が職務管掌に任命される
- ▲数十年来といわれる暴風雨により漁船98隻が被害を受け、罹災家屋も210戸余りとなる
- ▲余市～古平間の定期船末広丸(瑞広丸)が歌棄海岸で座礁大破、乗客は無かったが乗組員4人中3人が溺死する
- ▲古平経済更生五ヵ年計画委員会が発足する
- ▲鮫漁業組合(組合長大谷留蔵)が結成される
- ▲古平造林組合が結成される
- ▲愛国婦人会古平委員区を、愛国婦人会古平町分会と改称する

愛国婦人会のたすきと玄関に掲げる会員証→



↑専任校長を迎えて稲倉石小学校卒業式(昭和16年度)

→景勝地に指定され販売された
絵はがき(曾我商店)
国勢調査員辞令、記念品に
万年筆が贈られる



内閣

昭和五年七月二十日

國勢調査員命令

高野名幸作

